

『稽山承語』朱得之述 (三三) 三五〜四五条訳注

水野 実・永富 青地・三沢三知夫

【三五】

客有論慮患不可不遠者。師曰、見在福享用不尽、只管經營未來、終身人役而已。

〔訓読〕

客に患を慮ること遠ざけざるべからずと論ずる者有り。師曰く、見在の福、享けて用ひ尽くさず、只管ひたすら未来に經營すれば、終身人に役せらるるのみ、と。

〔語釈〕

○慮患 災いを心配する。

○見在 現に在るということ。

○經營 応対。

○終身 一生涯。終生。

【校異一】

○終身人役而已 「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)は「役」を「彼」に作る。

【三六】

或問、犯而不校与不報無道、何以不同。師曰、有意無意耳。又曰、犯而不校非是、不与人校長短。且如大明律。不曾有罪、懸法設科、人自犯之乃犯也。設使彼有九分九釐罪過、我有一釐不是、均是犯法、非彼犯我也。聖門之教只是自反自責、故曰不校。必是我全無不是、彼全無是處、然後謂之犯。如此而又不校、愛敬調停之心不倦不厭、方是好學。

【訓読】

或ひと問ふ、犯されて校いずと無道に報いざるは、何を以て同じからざる、と。師曰く、有意無意のみ、と。又た曰く、犯されても非是に校いず、人に長短を校いず。且まへば大明律の如し。曾て罪有らざるも、懸法・設科、人自ら之れを犯さば乃ち犯なり。設使たとひ彼九分九釐の罪過有るも、我一釐の不是有らば、均しく是れ法を犯し、彼我を犯すに非ざるなり。聖門の教は只だ是れ自ら反り自ら責む、故に校いずと曰ふ。必ず是れ我全く不是無く、彼全く是の処無く

して、然る後之れを犯さると謂ふ。此の如くなれども又た校いず、愛敬調停の心倦まず厭はざるは、方に是れ好學なり、と。

〔語釈〕

○犯而不校 『論語』秦伯に「曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多きを以て寡なきに問ひ、有れども無きが若く、実

つれども虚しきが若く、犯されて校いず」とある。古注には「校は報なり」とあり、新注には「校は計校なり」と。

○不報無道 『中庸』一〇章に「寛柔にして以て教へ、無道に報いざるは、南方の強なり」とある。

○有意無意 朱熹の注に「顔子の心、惟だ義理の窮り無きを知り、物我の間有るを見ず。故に能く此の如し」とあるのを承け、「犯されて校いず」を「無意」の方に配当したと考えられる。

○非是 正当ではない事をいう。後出の「不是」とほぼ同じ意。

○懸法 法令を公布すること。

○設科 法規を設けること。

〔校異〕

○犯而不校与不報無道 「狩野文庫本」「吉田氏所蔵本」は「校」を「校」に作る。

○必是我全無不是 「狩野文庫本」(「吉田氏所藏本」)は「必」を「心」に作る。

【三七】

甘于盤問学。終日只依良知而行、不覺常有出入之病。曰、只是不懇切。又曰、且如于盤登此樓、初登時只是一樓、既登見其制、坐定見其精粗、又見有何物在中。少頃又見物之精粗、尚有未見未知者。至於外人、聞說此樓欲見者、但望之而已。何由知其中之委曲。此猶致良知之学也。雖云淺深有得、亦豈便能尽良知之蘊。須是盤桓、精察日久日見日得、其樂至於左右逢原、方是良知用事。

【訓読】

甘于盤、学を問ふ。終日只だ良知に依りて行ふも、覺えず常に出入の病有り、と。曰く、只だ是れ懇切ならず、と。又た曰く、且へば于盤の此の樓に登るが如し。初め登りし時只だ是れ一樓なるも、既に登れば其の欸制を見、坐定まりて其の精粗を見、又た何物の中に在ること有るかを見る。少頃して又た物の精粗を見るも、尚ほ未だ見ず未だ知らざる者有り。外の人に至りては、此の樓を説くを聞き見んと欲する者も、但だ之れを望むのみ。何に由りて其の中の委曲を知らんや。此れ猶ほ致良知の学のごとし。淺深得ること有りと云ふと雖も、亦た豈に便ち能く良知の蘊を尽くさんや。須く是れ盤桓し、精察すること日に久しく日に見て日に得、其の樂しみ左右逢原に至れば、方には是れ良知の

用事なり、と。

〔語釈〕

○甘干盤 未詳。

○出入 『孟子』告子上に「出入時無く、其の郷を知る莫し」とあり、「出入」とは良心の出入のこと。良心が存することと失われることをいう。

○制 様式。

○盤桓 試行錯誤すること。

○左右逢原 『孟子』離婁下に「之れを資ること深ければ、則ち之れを左右に取るも、其の原に逢ふ」とある。

○良知用事 良知にまかせて事を行うこと。

〔校異一〕

○甘干盤問学 「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）は「問」を「門」に作る。

○左右逢原 「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）は「左」を「在」に作る。

【三八】

問、學業有妨於爲學、何如。曰、梳頭喫飯亦妨於爲學否。即此是學。學業只是日用間一事、人生一芸而已。若自能覺破得失外慕之毒、不徒悅人而務自儻、亦游芸適情之一端也。

【訓読】

問ふ、學業、學を爲すに妨げ有り、何如、と。曰く、梳頭・喫飯も亦た學を爲すを妨ぐるか否や。即ち此れも是れ學なり。學業は只だ是れ日用間の一事、人生の一芸のみ。若し自ら能く得失・外慕の毒を覺破し、徒に人を悦ばすのみならずして自ら儻るを務むれば、亦た游芸、適情の一端なり、と。

【語釈】

○梳頭 髪をくしげすること。

○自儻 『大學』誠意章に「此れを之れ自ら儻くすと謂ふ」とある。

○游芸 『論語』述而に「子曰く、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」とある。

○適情 性分に逆らわないこと。『淮南子』人間訓には「故に意を直くし情に適へば、則ち堅強之れを賊ふ」とある。

〔校異〕

○日用間一事 「狩野文庫本」(「吉田氏所藏本」)は「間」を「問」に作る。

〔三九〕

問 挙業必守宋儒之説、今既得聖賢本意而勘破其功利之私。况文義又不可通、則作文之時、一從正意乃為不欺也。今乃見如此而文如彼。何如。曰、論作聖真機、固今所見為近。然宋儒之訓乃皇朝之所表章。臣子自不敢悖、且如孔顏論為邦。行夏時乘殷輅。豈即行其言乎。故師友講論者理也。應舉之業制也。德位不備、不敢作礼楽、吾從周。無意必也。惟體古訓以自脩、可也。

〔訓読〕

問ふ、挙業は必ず宋儒の説を守るも、今既に聖賢の本意を得て其の功利の私を勘破す。況して文義も又た通すべからざれば、則ち文を作るの時、一に正意に従ふは乃ち欺かずと為す。今乃ち見る事此の如くにして文彼の如し。何如と。曰く、聖と作るの真機を論すれば、固に今の見る所を近しと為す。然るに宋儒の訓は乃ち皇朝の表章する所なり。臣子自ら敢へて悖らざること、且へば孔・顔の邦を為むるを論するが如し。夏の時を行ひ殷の輅に乗る、と。豈に即ち其の言を行ふか。故に師友の講論する者は理なり。應舉の業は制なり。徳位備はらざれば、

敢へて礼楽を作らず、吾は周に従はん、と。意必無く、惟だ古訓を體し以て自ら脩むれば、可なり、と。

〔語釈〕

○勘破 本質を見抜く。

○正意 原意、本意。

○行夏時乘股輅 『論語』衛靈公に「顔淵、邦を為めんことを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、股の輅に乗り、周の冕を服し、楽は則ち韶舞し、鄭声を放ちて佞人を遠さげよ」とある。

○応挙 科挙試験に応ずること。

○徳位不備、不敢作礼楽、吾従周 『中庸』二八章に「其の位有りと雖も、苟も其の徳無ければ、敢へて礼楽を作らず。其の徳有りと雖も、苟も其の位無ければ、亦た敢へて礼楽を作らず。子曰く、吾夏の礼を説く、杞は傲とするに足らざるなり。吾股の礼を学ぶ、宋の存する有り、吾周の礼を学ぶ、今之れを用ふ。吾は周に従はん」とある。

○意必 固執すること。『論語』子罕に「子、四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母し」とある。

〔校異一〕

○況文義又不可通 「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)は「況」を「兄」に作る。

【四〇】

嘉靖丁亥、得之將告歸請益。師曰、四方學者來此相從、吾無所卑益也。特与指点良知而已。良知者是非之心、吾之神明也。人皆有之、但終身由之而不知者衆耳。各人須是信得及、儘着自己力量、真切用功日当有見。六經四子亦惟指点此而已。近來學者与人論學、不肯虚心易氣商量箇是当否。只是求伸其說。不知此已失却為學之本、雖論何益。又或在聽此說話、不去真切體驗以求自得、只管逢人便講。及講時又多參以己見影響、比擬輕議先備得失。若此者正是立志未真、工夫未精、不自覺其粗心浮氣之發、使聽者虛謙問學之意反為弊塞。所謂輕自大而反失之者也。往時有幾箇朴實頭的。到能反己自脩、及人問時不肯多說、只說我聞得字問頭腦只是致良知。不論食息語默有事無事、此心常自炯然不昧、不令一毫私欲干涉、便是必有事焉、便是慎獨、便是集義、便是致中和。又有一等、淵默躬行不言而信、与人並立而人自化。此方是善學者、方是為己之學。

〔訓読〕

嘉靖丁亥、得之、將に歸を告げんとして益を請ふ。師曰く、四方の學者此に來たりて相ひ從ふも、吾、卑益する所無し。特だ与に良知を指点するのみ。良知は是非の心、吾の神明なり。人皆な之れ有り。但だ終身之れに由るも知らざる者衆きのみ。各人須く是れ信（得）じ及び、自己の力量を儘（着）して、真切に功を用ふべくんば日に當に見有るべし。六經四子も亦た惟だ此れを指点するのみ。近來、學者人と學を論するも、肯へて虚心易氣に箇の是當を商量せ

ざるや否や。只だ是れ其の説を伸ばすを求むるのみ。此れ己に学を為すの本を失却するを知らざれば、論すと雖も何の益あらん。又た或いは此に在りて些の説話を聴くも、去いて実切に體驗し以て自得を求めず、只管人に逢へば便ち講ず。講ずる時に及べば又た多くは参するに己見、影響を以て、先儒の得失を輕議せんと比擬す。此の若き者は正に是れ立志未だ真ならず、工夫未だ精ならず、自ら其の粗心、浮氣の発するを覺らず、聴者の虚謙に学を問ふの意をして反つて弊塞を為さしむ。所謂輕くしく自ら大として反つて之れを失ふ者なり。往時は幾箇の朴実頭なる的有り。能く己に反り自ら脩むるに到り、人の問ふ時に及べば肯へて多くは説かず、只だ我、学問の頭腦は只だ是れ致良知なりと聞(得)くと説く。食息、語黙、有事、無事を論せず、此の心常に自ら炯然不昧にして、一毫の私欲をして干渉せしめざれば、便ち是れ必ず事とする有り、便ち是れ慎独、便ち是れ集義、便ち是れ中和を致すなり。又た一等有り。淵默躬行して言はずして信あり、人と並び立ちて人自ら化す。此れは方には是れ善く学ぶ者にして、方に是れ己の爲にするの学なり、と。

〔語釈〕

○嘉靖丁亥 嘉靖六年(一五二七)。

○得之 朱得之。『稽山承語』(二) 解題参照。

○告歸 休暇を請うて故郷に歸る。

○請益 教えを請う。

○卑益 寄与すること。役立つこと。

○指点 指し示し教える。

○儘着 尽くす。

○虚心易気 嵇康の「養生論」に「骸を練り気を易へ骨を染し筋を柔く」とあるが、この場合、「易気」は「虚心」とほぼ同じ意。

○是当 的確妥当。

○商量 協議する。

○影響 伝え聞いたことや根拠のないこと。『伝習録』中巻羅整庵少宰に答ふる書に「之れを講ずるに口耳を以てするは、揣摩測度して、之れを影響に求むる者なり」とある。

○比擬 …しよんとする。

○浮気 尊大な心。

○軽自大而反失之者也 出典未詳。

○朴実頭 質朴な人のこと。

○必有事焉 『孟子』公孫丑上に「必ず事とする有りて、正ただにする勿れ」とある。

○慎独 『大学』誠意章に「故に君子は必ず其の独りを慎しむなり」とある。

○集義 『孟子』公孫丑上に「是れ集義の生ずる所の者、義襲ひて之れを取るに非ざるなり」とある。

○致中和 『中庸』首章に「中和を致して、天地位し、万物育す」とある。

○淵黙 心に秘め多く話さないさま。

○不言而信 『易』繫辭上に「言はずして信なるは、徳行に存す」とある。

○為己 『論語』憲問に「古の学ぶ者は己の為にし、今の学ぶ者は人の為にす」とある。

【校異一】

○又或在此聴些說話 『狩野文庫本』（「吉田氏所蔵本」）は「聴」を「徳」に作る。

○不令一毫私欲干涉 『狩野文庫本』（「吉田氏所蔵本」）は「于」を「于」に作る。

【四一】

問、責善朋友之道意、何如。師曰、相觀而善乃処友之道。相下則受益、相上則損。纔責善、便忘己而逐人、便有我勝於彼之意。孟子此言、為童子子父責善不善用其好善之心故云然。蓋謂責善在朋友中猶可用、若父子兄弟之間絶不可用。非謂朋友專以責善為道也。故曰、忠告而善道之。不可則止。朋友教斯疏矣。然則朋友中有過而不覺不改奈何。曰、以

善服人者未有能服人者也。以善養人、然後能服天下。

〔訓読〕

問ふ、善を朋友に責むるの道の意、何如、と。師曰く、相ひ観て善くするは乃ち友に処するの道なり。相ひ下れば則ち益を受け、相ひ上ぐれば則ち損す。纔かに善を責むれば、便ち己を忘れて人を逐ひ、便ち我の彼に勝らんとするの意有り。孟子の此の言は、章子の子父は善を責めて善く其の善を好むの心を用ひざるが為の故に然云ふ。蓋し善を責むるは朋友中に在りて猶ほ用ふべきも、父子兄弟の間の若きは絶えて用ふべからざるを謂ふ。朋友は専ら善を責むるを以て道と為すを謂ふには非ざるなり。故に曰く、忠も告げて善もて之れを道く。不可なれば則ち止む、と。朋友数々斯に疏なり。然らば則ち朋友中過ち有りて覺らず改めざるは奈何、と。曰く、善を以て人を服する者は未だ能く人を服する者有らざるなり。善を以て人を養ひ、然る後能く天下を服す、と。

〔語釈〕

○責善朋友之道 『孟子』離婁下に「夫の章子は子父善を責めて相ひ遇はざるなり。善を責むるは朋友の道なり。父子善を責むるは恩を賊ふの大なる者なり」とある。

○相観而善 『礼記』学記に「相ひ観て善くする之れを摩と謂ふ」とある。

○云然 強調の意。

○忠告而善道之、不可則止 『論語』顏淵に「忠もて告げて善もて之れを道く。不可なれば則ち止む」とある。

○以善服人者未有能服人者也、以善養人、然後能服天下 『孟子』離婁下に「善を以て人を服する者は未だ能く人を服する者有らざるなり。善を以て人を養ひ、然る後能く天下を服す」とある。

〔校異一〕

〔狩野文庫本〕（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【四二】

一日師曰、長途飯肆、望見行旅、便出道中要留欲飯之。其饑者則樂從、飽者則惡其留。雖多憎口、留客之意、終是不厭不息、是有所利也。某今所為実似之、見有過者、強留之強飯之。我之取於諸友者多矣。既業飯肆、亦自不能已於強客也。

〔訓読〕

一日師曰く、長途の飯肆、行旅を望見して、便ち道中に出で留むるを要め之れに飯せしめんと欲す。其の饑つる者は

則ち従ふを樂しみ、飽く者は則ち其の留むるを惡む。憎口多しと雖も、客を留めんとするの意、終に是れ厭かず息まざるは、是れ利する所有ればなり。某、今の為す所実に之れに似て、過る者有るを見れば、強ひて之れを留め強ひて之れに飯せしめんとす。我の諸友より取る者多し。既に飯肆を業とすれば、亦た自ら客に強ふるを已むこと能はざるなり、と。

〔語釈〕

○飯肆 飲食店。

○行旅 旅人。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所藏本」）との字句の相違はない。

【四三】

孔子歿、門人以有若似夫子、請以所事夫子事之。曾子雖不可、某窃有取於其事。未論有若之徳何如、但事有宗盟、則朋友得以相聚相賡、而当年同志之風不息。庶乎学有日新之幾、亦無吝是其是之弊。

〔訓読〕

孔子歿して、門人、有若の夫子に似たるを以て、夫子に事ふる所を以て之れに事へんことを請ふ。曾子不可とすと雖も、某窃かに其の事に取る有り。未だ有若の徳何如なるかを論せず、但だ宗盟有るを事とすれば、則ち朋友以て相ひ聚まり相ひ磨するを得て、当年の同志の風息まざらん。学、日新の幾有り、亦た各々其の是を是とするの弊無きに非からんか。

〔語釈〕

○孔子歿 門人以有若似夫子、請以所事夫子事之、曾子雖不可 『孟子』滕文公上に「昔者、孔子の没するや、三年の外、門人、任を治めて將に帰らんとし、入りて子貢に揖し、相ひ嚮ひて哭し、皆声を失ひ、然る後に帰る。子貢は反りて、室を場に築き、独り居ること三年、然る後に帰れり。他日、子夏・子張・子游、有若の聖人に似たるを以て、孔子に事ふる所を以て之れに事へんと欲し、曾子に疆ふ。曾子曰く、不可なり」とある。

○宗盟 講学の主宰者、『龍溪王先生会語』卷四、自ら訟むる長語を兎齋に示すに「或いは推されて入室の宗盟と爲り、將に終身、性命を以て相ひ許さんとす。庶はくは以て心を慰むるに足らんことを」とある。

○当年 往年。むかし。

○日新『大学』誠意章に「苟に日に新たにせば、日に新たに、又た日に新たなり」とある。

【校異一】

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。

【四四】

諸君聞吾之言、未能領悟者、只作乱説。不必苦求通曉、苦求記憶、且只切己用功、見善即遷、知過即改、常令此心虛明不滯、後日当有不待思索、自然契合、自然記憶者。

【訓読】

諸君、吾の言を聞くも、未だ能く領悟せざる者は、只だ乱説を作すのみ。必ずしも苦^{はげ}しくは通曉することを求め、苦しくは記憶することを求めず、且く只だ己に切に功を用ひ、善を見れば即ち遷り、過ちを知れば即ち改め、常に此の心をして虚明にして滯らざらしむれば、後日当に思索を待たずして、自然に契合し、自然に記憶する者有るべし。

【語釈】

○領悟 体得。

○乱説 しゃべり散らす。

○見善即遷、知過即改 『易』益卦象伝に「君子以て善を見ては則ち遷り、過ち有れば則ち改む」とある。

〔校異一〕

○不必若求通曉、若求記憶 「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)は「不必若求通曉、若求記憶」に作る。

○自然記憶者 「狩野文庫本」(「吉田氏所蔵本」)は「憶」を「億」に作る。

【四五】

或問、裴公休序円覚経曰、終日円覚而未嘗円覚者凡夫也。欲証円覚而未極円覚者菩薩也。具足円覚而住持円覚者如来也。何如。曰、我替他改一句。終日円覚而未嘗円覚者凡夫也。欲証円覚而未極円覚者菩薩也。具足円覚而住持円覚者羅漢也。終日円覚而未嘗円覚者如来也。

〔訓読〕

或ひと問ふ、裴公休、円覚経に序して曰く、終日円覚にして未だ嘗て円覚ならざる者は凡夫なり。円覚を証さんと欲

して未だ円覚を極めざる者は菩薩なり。円覚を具足して円覚を住持する者は如来なり、と。何如、と。曰く、我、他に替りて一句を改めん。終日円覚にして未だ嘗て円覚ならざる者は凡夫なり。円覚を証さんと欲して未だ円覚を極めざる者は菩薩なり。円覚を具足して円覚を住持する者は羅漢なり。終日円覚にして未だ嘗て円覚ならざる者は如来なり、と。

〔語釈〕

○裴公休 裴休。河南の人、字は公美。『旧唐書』卷一七七、『新唐書』卷一八二に伝あり。また『景德伝灯録』卷一一参照。

○序円覚経曰、終日円覚而未嘗円覚者凡夫也。く具足円覚而住持円覚者如来也。彼の『大方広円覚経疏』序は『新纂大日本統藏経』第九卷、二四三に収録されている。

○円覚 円満なる大覚。仏の悟り。

○住持 把持して失わないこと。

〔校異一〕

「狩野文庫本」（「吉田氏所蔵本」）との字句の相違はない。